

平成28年度岡山大学大学院社会文化科学研究科博士前期課程【2月募集】入学試験問題

講 座	日本・アジア言語文化論
小論文（日本文学）	

問題

文芸評論家の川村湊の『異郷の昭和文学—「満州」と近代日本』は、研究の対象を「昭和時代に満州という地で書かれた文学、すなわち、いわゆる「満州文学」、満州およびその周辺を舞台とし、そこに何らかの関わりを持つ人々を登場人物とした作品、満州という土地、風土、住民を居住者あるいは旅行者として記録、創作した作品、そしてそうした文学作品について論評した批評、研究の作品、すなわち「満州に関する文学」（これを広義の「満州文学」と呼ぶことにする）」とすると述べたうえで、その担い手を①夏目漱石を初めとする、満州を旅行し、その印象や感想や取材したことがらを紀行や創作として発表した一群の文学者、②中島敦を初めとする、満州に移住し、居住者として生活しながら文学に携わった人々、③五味川純平や清岡卓行を初めとする、満州に生まれ、育ち、そして戦中、戦後において日本列島に引き揚げて来た人々、の3種類に分類して論述を進めてゆくものであるが、その観点を踏まえて、この研究の必要性と問題点についてあなたの見解を論述せよ。

なお、論述に当たっては以下の用語群のなかから最低4つを使用すること（使用順は問わない）。

用語：コロニアリズム、ナショナリズム、大東亜文学者大会、尾崎秀樹、梅娘、古丁、文学史

問題文で利用した著作物の引用箇所：川村湊『異郷の昭和文学—「満州」と近代日本』（岩波新書、1990年）21～22ページ

以上